



Title	「女の子向けの児童書」に見る性役割と少女文化
Author(s)	
Citation	令和6（2024）年度学部学生による自主研究奨励事業 研究成果報告書. 2025
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/101246">https://hdl.handle.net/11094/101246</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

## 令和6年度大阪大学未来基金「学部学生による自主研究奨励事業」研究成果報告書

ふりがな 氏名	うすい ゆうこ 碓井 結子	学部 学科	文学部人文学科	学年	3年
ふりがな 共同 研究者氏名	おじま ひな 尾島 雛々	学部 学科	文学部人文学科	学年	3年
	かんだ ななみ 神田 七海		文学部人文学科		3年
					年
アドバイザー教員 氏名	中嶋 泉	所属	人文学研究科		
研究課題名	「女の子向けの児童書」に見る性役割と少女文化				
研究成果の概要	研究目的、研究計画、研究方法、研究経過、研究成果等について記述すること。必要に応じて用紙を追加してもよい。(先行する研究を引用する場合は、「阪大生のためのアカデミックライティング入門」に従い、盗作剽窃にならないように引用部分を明示し文末に参考文献リストをつけること。)				
はじめに					
<p>女子小学生、女子児童を対象として発行されている娯楽的な読みものがある。俗に「女兒本」と呼ばれているこれらの書籍は、西東社から2009年に出版された『ミラクルあたる! ヒミツの心理テスト』を皮切りに、今では新星出版社やナツメ社などいくつもの出版社が手掛け、これまでに100冊以上が出版されている。その出現は2000年代と最近のことでありながら、現在の少女文化において確固たる地位を築いているように見える。後述するように、この女兒本の多くは女子児童たちに「小学生女子」にふさわしいふるまいの規範を与えるものであり、それによって、少女たちは「幸せをつかむ」ことができると主張する。</p> <p>では、この「幸せ」とはいったい何を指すのだろうか。女兒本の中で読者と共にふるまいを学ぶ少女たちは、ほとんどの場合学んだ先で恋人を手にし、そうでなくても背表紙には男性と寄り添う少女が描かれる。恋愛の話題を扱わない「女兒本」は存在しない。「カレ」の心を奪うために、少女たちは規範を学び、内面化する。</p> <p>明治時代以降の少女文化において、少女たちに規範を示す主な媒体は雑誌であった。今田[2007]は、『少女の友』に掲載された小説は読者に少女らしい行動規範を示すものであったことが明らかにされている。ほかに櫻坂[2013]はファッション誌が性役割を再生産する過程を論じている。これらの研究からは、これまで少女が触れる媒体は小説やマンガ、ファッションなど中心的な内容を持っており、その内容のなかで「少女らしい規範」は暗示されるか、付随的に書き添えられるものであったことが指摘されている。しかし、現代の「女兒本」は、「こうすべき」、「こうするとよい」などと助言の形をとりながら、「規範」を示すことを主目的にしている。</p> <p>本研究では、この「女兒本」が示す「少女らしさ」の規範に着目することによって、少女文化において現代でも男性を社会の中心として据えた価値観が再生産されていることを論じたい。収集の対象</p>					

とした書籍は、少女たちが恋愛に参加するために身につけるべきふるまいやマナーに対する言及があるものとした。

少女と恋愛という観点では、淵上[2007]が『小学一年生』などの小学館の学年別学習雑誌を対象として研究を行っており、少女が恋愛への関心を強める時期が小学5年生ごろであること、また少年たちの興味を持つよりも早い段階のことであることを示している。ほか、中村[2009]が少女の用いる一人称に注目しながら少女が大人の女性になる過渡期における葛藤を論じており、またその中でペネロップ・エッカートによるアメリカの「異性愛市場」について紹介している。しかしながら、管見の限りでは「女兒本」の研究は行われていない。

このような状況を踏まえ、本研究においては、「女兒本」がどのように生まれたものであるのかについて考察を行い、そのうえで「女兒本」の示す理想の少女像を明らかにしたい。

研究の計画段階では、一次資料の収集、分析、理論についての学習、少女雑誌研究の確認、出版社への聞き取りを実施したいと考えていた。ただし、諸般の事情により出版社への聞き取りが本研究においては叶わなかった。実際に行った研究としての経過、方法は以下のとおりである。

7～9月 : 一次資料の収集、同時にファッション誌に関する研究の参照

10～11月 : 一次資料の分析、少女雑誌の研究の調査と理論研究

12月 : ポストフェミニズム理論、とりわけこの文脈で取り沙汰されるようになった「女子力」という用語についての調査、少女マンガ誌研究の調査

当初の計画には含んでいなかった要素として、少女マンガ誌の研究と「女子力」研究の調査がある。少女マンガ誌は明治期より存在する少女雑誌と女兒本とのあいだの時期をつなぎ、少女文化を継承するメディアとして非常に重要なものであると考えられたため追加した。また、「女子力」の受容のされ方は「女子力」という言葉が流行した時期と、女兒本が流通した時期が重なっていることや「女子力」として共有されている内容が女兒本の示す規範との強い関連がみられると予想されたために参照した。

以上、研究目的と研究計画、経過、方法を明らかにした。以下で本報告の構成を示す。第一章では、「女兒本」がどのように誕生し、どのような性質を持ったものであるのか、時代背景や内容を元に考察を行う。第二章においては、「女兒本」による異性愛への呼びかけがどのようなものであるか論じる。続いて第三章において、少女に与えられる制限について論じる。報告の末尾には、今回収集した女兒本の一覧を記載している。

## 1. 「女兒本」とは何か

本研究は「女兒本」を対象とするものである。「女兒本」の存在については、少なくとも大学生である筆者の周りではある程度知られたものであるが、内容を共有しているのは女性のみで、読者層は閉ざされた状態にあるといえる。後述するが、その誕生は2000年代であると考えられ、比較的新しい書籍ジャンルである。ここで用いている「女兒本」という呼び方自体も主にインターネット上で一連の書籍群に対して与えられている呼称にすぎず、一般に定まったものではない。

したがって、本章においては「女兒本」の定義を行いたい。「女兒本」にはどのようなことが書かれているのかを確認したうえで、その誕生を考察する。本研究で分析を行う対象はその一部ではあるが、この章では「女兒本」の世界観を広く概観することを目的としている。

## 1-1. 「女児本」とは

まずは、主な内容についてまとめる。今回の研究対象としてはふるまいについての記述があるものを主としているが、「女児本」自体はもう少し広く定義できる。大まかなジャンルとしては3つ、①おはなし②おまじない・心理テスト③技能指南に分けられるだろう。

おはなし、とした①は少女向けの物語を華やかな表紙と挿絵で紹介するものであり、偉人の伝記、友情・恋愛の物語、動物との絆、ホラーなど一定のテーマが設定されている。少女マンガと通底するようなテーマであるといえるだろう。

②おまじない・心理テストはその名の通りであるが、おまじないや心理テスト、占いなどが扱われている。その内容としては、「好きな人と結ばれる」「友だちと仲直りできる」「成績が上がる」など学校生活に沿ったものが多い傾向にある。

最後が、技術指南の③である。傾向としてはファッションに関するものが最も多く、その他にはお菓子作り、イラスト・文字、マナーなどの指南を行うものが存在する。少女たちはこれらを読むことによって、甘いお菓子を作り、かわいらしいイラストや文字を書き、少女らしいふるまいを身に着ける。これらの習得によって少女たちは理想とされる少女像に近づいていく。

今回取り上げるマナーに関するものは③に含むこととしているが、マナーの指南のみで独立しているものはごく少数で、「かわいくなるためには内面を磨くことも必要である」としてファッションと融合する形が多い。特に初期においてはその傾向は顕著であるといえる。

また、③に挙げている技術指南における典型的かつ特徴的な要素として、ストーリーラインの存在が挙げられる。技術の指南という側面から考えた場合、物語は必要ではないだろう。しかしながら③の「女児本」では、技術を習得したいと考える女の子が登場し、その女の子と共に段階的に「かわいく」なっていくという展開が多い。

想定されている読者についても改めて確認しておく。「女児本」を多く出版してきている西東社の担当者は2019年にネットメディアでのインタビューに応じており、その対象年齢が小学校中学年から高学年であると述べている[オリコンニュース, 2019]。この意図と同じく、読者と共に「かわいく」なる女の子たちも小学4年生から6年生の範囲に収まることが多い<sup>1</sup>。

実際の読者層については明確に述べるに足る情報が収集できていないが、通販サイトのレビューなどを確認する限り、大部分は出版側の意図と一致していると考えられる。ただし、SNS上において『かわいいのルール；自分をもっと好きになる』（池田書店）などを筆頭としていわゆる「バズ」を経験したものが存在し、男性の関心が向けられている場合もある<sup>2</sup>。この現象自体は非常に興味深くあるものの、本研究の趣旨とは異なるため、ここでは考慮しないものとする。

また、女児本に特徴的なこととして挙げられるのがその制作者のほとんどが女性であることである。戦後の少女雑誌や女性のふるまいを指南するような書物において、女性の規範を再生産するのは男性が中心であった。それに対して、女児本では、大人になった女性たちがかつて小学生だった頃に知りたかったことを伝えるという目的で出版されており、アドバイザーなどとして関わる専門家などもほとんどの場合が女性である<sup>3</sup>。

<sup>1</sup> 具体的な学年の設定は確認できない場合もある。

<sup>2</sup> リアルサウンドブック 2024.5.10「なぜ？女児向け本、社会人から大反響で10万部突破 編集者が明かす、意外なヒットの理由」[https://realsound.jp/book/2024/05/post-1656224\\_2.html](https://realsound.jp/book/2024/05/post-1656224_2.html) より（2024年12月23日参照）

<sup>3</sup> 注2に同じ。専門家としては、産婦人科医、心理カウンセラー、スタイリストなどが登場することが多い。

以上、「女兒本」について主な特徴を述べた。大きく3つの分類が可能であるが、上記したように、今回取り上げるものはその中でも、技術指南本であり、マナーに関わるものである。なお、読者層としては小学校中学年から高学年を想定するものとする。

## 1-2. 「女兒本」の発生：技術指南を主として

第一節で確認したように、「女兒本」のなかでマナーに関するものを取り上げた際、そこに付随して記載されている情報はファッションが中心である。心理テストなども扱われる場合があるが、それはあくまでコラムのようなものであり、「(かわいくなるために) 外見を磨く・内面を磨く」ということが書籍の中で一貫したテーマとなることが多い。

以上のことを勘案した場合、最も類似した性質を持つと考えられるのは女性向けファッション誌であろう。しかしながら、資料の検討を通して、その源流として少女マンガも考慮に入れるべきであると考えられることが明らかになった。本節では「女兒本」の誕生に際しての少女マンガ雑誌との関連について主に論じることとしたい。

西東社<sup>4</sup>の編集者である大橋氏は、ネットメディアのインタビューで女兒本のシリーズである「ミラクルシリーズ」について、「新しいタイプの児童書を作りたいと思った」と述べている[オリコンニュース, 2019]。このシリーズは2009年にスタートしたものである。2009年以前に発行された同様の書籍についても調査を行ったが、研究の及ぶ範囲においては見つかっていない。したがって、この2009年の「ミラクルシリーズ」の発行をもって女兒本の誕生とみなすこととする。

さて、女兒本が誕生した時代である2000年代は、小学生女子が消費文化のなかに主体として組み込まれていく時代であったといえる。杉本[2015]は、2000年代に『ちゃお』が読者モデルを導入し、外見の修辭に大きな関心を持つ主人公がかわいくする方法を読者に紹介するような構成の作品の連載を相次いで行うなど、総合誌のような性質を復活させながら、小学生の消費を促進していたことを指摘している。同時に中高生向けであったブランドがファッションやコスメのブランドを小学生向けに新たに展開していた[杉本, 2015]。また、ファッション誌である『nicola』が小学生向けに『ニコプチ』の展開を開始したのも2006年である。

この中で、「女兒本」の誕生という視点から注目しておきたいのが2000年代の『ちゃお』に連載されていた『極上!!めっちゃモテ委員長』<sup>5</sup>である。この作品の主人公は外見の修辭に関心を持っており、杉本[2015]の指摘する特徴に一致しているといえよう。主人公の未海は作中でしばしば他人に対して「どのようにふるまうことでモテることができるのか」を指南する。

この作品自体女兒本と類似した性格を持っていたが、この指南の内容を集めて一冊にまとめたものが、『極上!!めっちゃモテ委員長 未海ちゃんになるため10の方法』として独立して2009年に刊行されている。これが「ミラクルシリーズ」の発売とほぼ同時であることから、関連性を明確にするには不十分ではあるものの、少女マンガを中心とする文化がこの時期、女兒本と同じく装いなどに関する女子小学生への指南を扱うことへの関心があったことは確認できるだろう。

続いて、紙面の構成に目を向ける。女兒本の大きな特徴として挙げられるのは、そのイラストの多さである。ファッション誌においてはその大部分が写真で構成され、イラストの利用はごく一部分である。一方で少女マンガ誌はそのほとんどがイラスト、あるいはマンガによって構成されており、こ

<sup>4</sup> 西東社は現在まで継続的に女兒本を出版している。「ミラクルシリーズ」はホームページで確認できるだけで73冊存在しており、女兒本のパイオニアかつ最大手であるといえる。

<sup>5</sup> にしむらともこによる作品。2006年から2014年まで連載されている。

ちらの方が女兒本の紙面の性質と似通ったものであるといえる。

ファッションの指南という観点では、実際の着用場面を示すという意味で写真を提示すべきと考えるのが妥当であろう。しかしながら、ほとんどの女兒本はイラストによってこれらを指南しており、写真を用いているものは少数である。女兒本におけるイラストは、少女たちが努力することによってどのように変化するかを視覚的に示すものとして登場する。写真ではなくイラストを用いてファッションの指南を行うことで、努力による変化を実現可能な範囲を超えて表現することができるといえる。

以上、少女マンガと「女兒本」の接続について検討を行った。多くの面で「女兒本」は少女マンガに類する点が多く、その源流のひとつとして少女マンガ誌を検討する必要があるだろう。ただし、2012年にピチレモンの系列誌が発売されるなど、比較的初期に便乗する形でファッション誌を出版するレーベルが参入したことも確認できている。ファッション誌との関連も無視できるものではない。少女マンガ誌とファッション誌の性質が融合したものとして、女兒本は捉えられるのではないだろうか。

## 2. 異性愛の強制

第一章では、本研究が対象とする「女兒本」の定義を行った。本章においては、女兒本がどのように異性愛規範を身につける動機づけを行っているのかを確認し、そのことを基にして「男児本」に相当するものの不在と、異性愛規範習得のための努力が女性にとってのエンパワメントとなりうるかについて論じる。

### 2-1. 女兒本と異性愛

本研究の冒頭で、女兒本にとって異性愛が重要なキーワードとなりうることを述べた。しかし、近年では多様なセクシュアリティの存在は広く知られるところとなっている。本節においては、このような状況のなかで、女兒本がどのようにして異性愛の規範を再生産するのかについて論じたい。

「女児本」は総じて少女たちに異性愛への疑問を抱かせない物語によって成り立っているが、異性愛が自然であると思わせる方策のひとつとして、同性愛の否定があることは注目に値する。たとえば『ミラクルハッピーおしゃれガールレッスン DX』[西東社, 2015]において、「キレイのルール」という項に「女の子の友達を好きかもしれない」というお悩みが登場するが、これに対して、友愛との勘違いではないかという趣旨の回答が示されている。その締めくくりには「同性を好きになる人もおり、それは病気や異常ではない」との断りはあるものの、少女たちが最初に目にする回答は同性に恋愛感情を持つことへの否定的な記述である。同様に、『自分をもっと好きになる【ハピかわ】かわいいのルール』[池田書店, 2019]においては、「好きな人ができないのは変なのか?」という質問に対して「……あせらなくて大丈夫。……ステキ女子計画にはげんで、ステキなカレをゲットしちゃおう!」[池田書店, 2019; p. 256]と答えており、アセクシュアル(無性愛)を排除し、恋愛対象を男性に制限する異性愛至上主義の態度が確認できる。

このような記述は多くの女児本にみられるもので、同性愛に関して肯定的な記述がみられるようになるのは2023~24年のことである。今回収集対象としたものの中では2冊のみで、『ミラクルハピネス魔法のことばレッスン』[西東社, 2023]に同性への告白についての記述があるほか[図1]、『ミラクルハピネス素敵なからだレッスン』[西東社, 2023]では、同性の方が好きでもおかしいことではない、と補足的な形ではあるが書かれている。これらはどちらも西東社のものであり、他の出版社による書籍からはこのような記述は確認できない。そして、これらの描写自体が読者に同性愛当事者がいることを想定しているものではなく、同性愛者に出会ったときに「異端ではないので排除しないように」と呼び掛けているに過ぎない。女児本におけるセクシュアリティの規範は、現代日本で一般化しつつあるセクシュアルマイノリティやジェンダー多様性への認識に比しても後進的であるといえよう。

また、事実女児本における異性愛指南は、強制的であるとすらいえる。「恋のお悩み」などのコーナーを設置している女児本においては、そのほとんどの場合で「恋バナについていけない」という意見が登場している。このようなコーナーが登場するのは2010年代後半になってからという傾向はあるが、これは異性愛が当然のものとする規範のなかで、そこから疎外されている状態から発生するものであるといえる。さらに、このお悩みへの回答としては前述のように「そのうち好きな人ができる」というものがほとんどだ。彼女たちは否応なしに、異性愛の現場に参加することが求められている。

このように、女児本の中では異性愛が「普通」のこととされ、それ以外が排除されてしまうという構造が確認できる。これらは異性愛規範の再生産であると考えられ、少女たちに異性愛への参加を強制するものであると言えるだろう。

## 2-2. 「男児本」の不在

第一節で確認したのは、女児本が少女に対してどのように異性愛を強制しているのかということである。このことは「女児本」が持つ少女への抑圧を確認するうえで必要な作業であったが、女児本が主題とするのは、どのようにすれば異性愛中心の場で効果的に地位を築くことができるのかということである。



図1: 西東社, 2023『ミラクルハピネス魔法のことばレッスン』

第一章において女兒本を定義した際、その読者層として男性が存在することに触れた。インターネット上では『かわいいのルール：自分をもっと好きになる』[2019, 西東社]が二度話題になっている。一度目は2020年、女性を中心とした「これらの書籍は小学生女子にとって必要なものである」という言説であり<sup>6</sup>、二度目が2024年、男性を中心とした、「この書籍は男性も読むべき社会人として必要な情報が全て網羅されたものである」というものである<sup>7</sup>。

二度目に取り沙汰された際、この話題に触れた男性たちがしきりに述べていたのが、「少年向けにはこのような本が存在しない」ということだ。本節においては、男児と女兒がそれぞれどのような言説に触れて成長し、異性愛に対する価値観を築くのかについて考えたい。

淵上[2007]は、学年別学習誌において、男子向けのマンガでは恋愛に焦点が当たらず、女子向けのマンガにおいて表象される男子も恋愛に興味が無いように描写されることを述べている。また、今田[2014]は、少年誌の研究を通して、男子同士の関係性の方がより利益があるものとして捉えられており、その結果として異性愛は重視されないということを指摘している。

このように、少年向けのメディアにおいては伝統的に恋愛が重視されないということが明らかにされている。そのため、少年たちは自分自身を恋愛の対象として意識することなく成長する。少年たちにとっては恋愛に参加するための努力は必要のないものであり、それゆえにその努力を指南する書籍は存在しない。

それに対して、少女たちは常にきらびやかな恋愛の世界という幻想を前提とした読み物に触れながら成長する。女兒本の表紙にはキラキラとかわいらしい小物に囲まれた、マンガ風の少女が描かれており、ときには彼女に対して羨望のまなざしを向ける少女たちすら描かれる。少女たちは、その華やかな少女に同一化することを求められ、そのための努力をすることとなる。

また、それらの美しい少女と並んで、表紙には「キラキラガール」や「ステキ女子」になろう、というメッセージが書かれている。このような、殊更に「女の子」であることを強調したうえで美しさを求める文言は、少女たちにとっては努力によって理想の自分になれるというメッセージとして、少女たちを勇気づけるものとなるだろう。しかし、裏を返せばこれは地位の向上のためにはこれらの努力が必要なものであるというメッセージとしても成立しうるものである。

そのほか、ストーリー内でも、年上の女性をロールモデルとして恋愛至上主義への呼びかけが行われている。少女がロールモデルとするのは、女子中学生、女子高校生、友人の母などさまざまな年上の女性である。彼女たちはそのほとんどがモデルなどの見られる対象としての女性である。

恋愛が少年たちにとっては決して重要なものではないことに対し、少女たちにとっては、大いに利益をもたらすものであると考えられている。そのために、少女たちは必ず恋愛に参加する努力をしなければならない。少女たちは、女兒本の中でも多様な形の呼びかけによってこの努力を要請される。しかし、その努力は少女たちに主体性を求めるものではなく、あくまで男性に選ばれる、見られる対象としての自分を磨くということに帰結するようになっている。ここには、少女と少年の間での、恋愛への取り組み方に関する非対称性を見出すことができるだろう。

### 2-3. 獲得すべき「女子力」

<sup>6</sup> X(旧 Twitter) しましま (@shima\_ryo\_iku) 2020年12月10日:

[https://x.com/shima\\_ryo\\_iku/status/1336952545709678592](https://x.com/shima_ryo_iku/status/1336952545709678592) (2024年12月23日参照)

<sup>7</sup> X(旧 Twitter) hisagi (@hisagi) 2024年4月28日:

<https://x.com/hisagi/status/1784468758876373279> (2024年12月23日参照)



女兒本においてさまざまな努力をすることは、異性愛への参加のためであり、そこには男女での非対称性があることを第二節で確認した。しかしながら、男性のためであると明示することは徐々に減少した。2021年ごろからは、「なりたい自分になる」「わたしが好きなわたしになる」など、あくまで己のために努力をするという少女像が目指すものとして明確に提示されるようになっていく。

このような、己のために獲得する女の子らしさというのは女子力とされるものと通底するものがあり、実際女兒本においても、「女子力」という言葉はしばしば登場している。本節においては、「女子力」についてポストフェミニズムの文脈で論じられてきたことを確認しつつ、これらが必ずしも少女たちのエンパワメントとして機能しないことを確認しておきたい。

「女子力」という言葉は、近年でこそ批判の対象として挙げられることも増えているが、その初期においては非常に肯定的に用いられる言葉であった。女性自身が努力することによって自らの地位を向上させることは、女性の社会的地位の向上に対して有力なアプローチとなりうると考えられたからである。

しかし、菊地[2019]が大学生に対して行ったアンケートの結果から見ても、「女子力」の内容はかつての「女らしさ」から変化しているものではない。「女らしさ」と「女子力」の違いをあえて挙げるとするのであれば、後者において、それが自然に身につくものではなく、努力によって習得されるものであるということが含まれるという点のみである。

こういった自助努力としての「女子力」は、女兒本においても顕著に表れている特徴といえよう。繰り返すが、女兒本における異性愛の場への参加は努力の結果として獲得されるべきものであり、女性が生まれながらにしてその参加権を持っているわけではない。

恋愛市場に参加することのできる女の子が特権階級として描かれることは近年の女兒本では減少傾向にあるが、どのような女の子であっても、「女の子らしく装うことができれば」恋愛市場に参加することができるのだ、というようなメッセージは常に発信され続けている。『ミラクルガール相談室女の子のトリセツ』[西東社, 2018]で登場する少女は、自分に自信がなく意中の人間に好かれることをあきらめているが、友人から努力をするように誘われ、「彼からかわいいと思われる」ことを動機として「キラキラ女子」になることを目指す。ここでいう努力とは「女の子らしく」装うことを意味しており、この後少女は化粧の習得とスカートの着用によって男性に発見されるというストーリーが展開される。

この努力が異性愛の場での地位の向上にしか繋がらず、女性の地位向上を必ずしも指すことがないということはここまでの論から明らかであろう。さらに言えば、ここで少女を発見する男性はあくまで物語の中の存在であり、少女たちの描く幻想の世界においてのみ成立可能なものである。

淵上[2007]の議論はその点で興味深い。少女マンガ誌の中では男性は主体的にかわいらしい女性を発見し、恋愛に参加する姿勢を見せるが、両性を対象としている学年別学習誌においては、少女向けのマンガの中であっても男性は恋愛に対して消極的である[淵上, 2007]。男性が恋愛に対して積極的であるという状態は、少女の中の文化においてのみ確認できるものなのである。

以上、己の社会的地位を向上させるために有用であるかのように描かれている「女子力」が、これまでの議論と同様に、女兒本においても異性愛基準での地位の向上にしか影響を与えないことを論じた。これらは女性のエンパワメントとしての機能を十分に持たず、女性が男性と同列の存在となることを阻むものであるということができよう。

### 3. 「清純な少女」

第二章においては、女兒本の中でどのようにして異性愛を強制しているのかというその構造を検討した。少女たちは女兒本を通して、再生産された異性愛の規範を習得することとなる。しかし、異性愛規範を受け入れた後でも、少女たちは思うままにふるまうことは許されない。本章では、少女たちが異性愛規範のなかでどのような規制を受けるのかについて論じていきたい。

### 3-1. 少女たちに与えられる規制

中村[2009]は、ペネロップ・エッカートによる「異性愛市場」という概念を紹介している。これによれば、少女たちは異性愛を受け入れることで地位を向上させることが可能であるものの、性の対象とされることを受け入れなければならない、という部分で葛藤が生まれることが述べられている。

「異性愛市場」の「市場」という部分については、中村[2009]は「短期間に交際相手に変化していくこと」を指して表現しているものであるとしている。この点については日本では確認できないものであるといえるだろうが、少女たちが葛藤を抱くということに関してはこの「異性愛市場」と同様の構造を見出すことができるのではないだろうか。

性の対象とされることに対する恐れというのは、「ふしだら」とされることへの恐怖と言い換えることができる。本節では、「ふしだら」と判断されないための大人から与えられる正しい「選択」がどのようなものであるかを検討したい。

多くの女兒本には、恋愛に関する読者のお悩みを解決するコーナーが存在する。そこにほぼ必ずと言ってよいほど「カレにキスをせまられたときは？」というお悩みが登場し、それに対する回答として、「キスを許すとその先に進んでしまうかもしれない」ために、断るべきであると述べられる[図 2, 3]。そのうえで、この年代の男子は性への関心が高まっている時期であり、仕方のないことであるから、自分が嫌だと伝えて相手に納得してもらうことが必要であるとされる。

このように、女子小学生に許される男女の交渉は「手を繋ぐ」など性愛に踏み込まない程度の身体的な接触に留まると考えられ、キス以上は「ふしだら」な行為であるとされる。異性愛への順応を求めながら、実際の交際ではそれが決定的な領域に踏み込む前に押しとどめようとする。少なくともメディア内において、小学生の少女たちはキスをすることが認められない。

しかしながら、「その先に進む」ことを理由として断るべきであるとされることは、同時に「その先」に何があるのかを少女たちに知することを求めているともみなすことができる。未知の行為に対してあらかじめ恐怖感を与えたうえで、それを知るように誘導することにより、性の知識と、それが「ふしだら」であるという意識を与えている。

この誘導によって少女たちは、知識は持ちながらもその行為には及ばない、という大人たちが少女に求めてきた「純真さ」を守ることになる。桑原[2014]によれば『セブンティーン』においてはキスに関

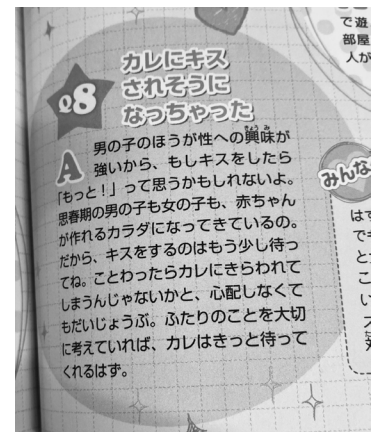


図 2: 西東社, 2015『おしゃれ ガール レッスン DX』

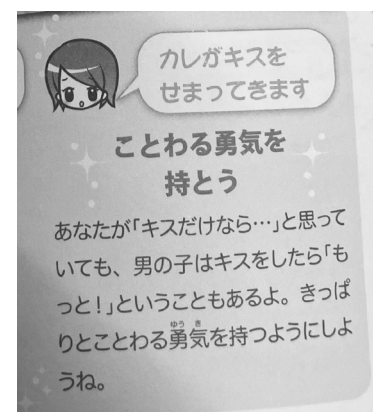


図 3: 西東社, 2010『ミラクルかわる！ キレイ&おしゃれのヒミツ』

するアドバイスが行われているため、少なくとも中高生になるまで少女たちにとってキスは禁止されたものであるだろう。とはいえ、桑原[2014]は同時にそれ以上の交渉についての指南の不在を論じているため、中高生の少女たちにも部分的に規制が行われているといえるだろう。

本節では、少女たちが異性愛に参加する際に受ける規制について論じた。少女たちは異性と付き合うことを求められながら、ほとんど一切の性的な交渉を禁じられている。これによって、少女は知識を持っていながらそこに踏み込まない、清純な少女であることを求められる。

### 3-2. 女性による女らしさの再生産

これまで論じてきたように、女兒本はある種伝統的ともいえる異性愛規範の再生産に加担しているものとして捉えることができる。「女らしさ」の規範はかつて自然に身につけているべきものとして語られていたが、次第に努力の先にあるものとして認識されるようになった。しかしながら、その努力が女性のみ求められるものであることは変化していない。ところが、これらの努力は女性の地位を向上させるものとして、女性たち自身にも捉えられている。

女兒本は、女性たちによって作られるメディアである。西東社で『ミラクル』シリーズの編集を担当する大橋氏、池田書店で『はぴカワ』シリーズを担当する老沼氏はどちらも女性であり、また、両者ともに女兒本を作る動機について、「子供の頃にこういう本がほしかった」と思ってもらえるものを作りたい、ということ述べている。

男性から女性に対して「このように振る舞え」との押し付けを行うことは、決して失われたということはないものの、第一波、第二波フェミニズムの成果もあり不適切であると広く認識されている。しかしこのような成果ゆえに、フェミニズムはすでに終わったものとして捉えられることも多い。女性に対しても道は平等に開かれているのだから、あとは女性自身の努力によって社会的地位を上げるべきであるという考え方は、男性のみのものでなく、男女ともに多くの人が持つようになった。

そこで女性たちは社会的地位の向上の方法を模索し、女性同士の協力として、次の世代にもその方法を伝えていこうという取り組みが発生するが、女性にとっての「幸せ」が男性と結ばれることであることは変化していない。つまり、男性によって再生産されてきた女性のふるまいに関する規範は、引き続き異性愛を基準とした幸せのためには有用なままであるということになる。このようなところから、女性たちによる規範の再生産は行われるのではないだろうか。

### 3-3. 「プリンセス」的少女像

第一節においては、少女が異性愛の場での性的な交渉が認められず、清純な少女が求められていることを論じ、第二節においてはその規制を与えているのが女性であることについて論じた。本節においては、ここまでを踏まえたうえで、理想の少女がどのようにふるまうものなのかについて一次資料に基づいた考察を行いたい。

女兒本のストーリー展開は非常に少女マンガ的である。少女は美しくなるための努力をし、その結果として条件の良い男性に発見される。2010年代前半の女兒本では「学園の王子」的存在から見初められるストーリーが多いが、後半からは既知の同級生の男の子が努力している姿を見て恋愛の展開へと運ばれていく。このような変化は存在するが、どちらの展開も少女マンガでは「王道」といえるものだろう。

これらの展開は非常に「プリンセスストーリー」的である。美しい女性が、男性に発見されることによって「女性として」成功する。女兒本とプリンセスストーリーとの相違点としては、少女が己で

美しくあるための努力を明確に求められることと、そのお話の主人公が現実に存在する「小学生」であり、実現可能性が高いように思われることの二点であろう。

若桑[2003]は『お姫様とジェンダー』で、プリンセスストーリーが女性たちを受動的にし、また幼児性、つまり「かわいさ」に固執させるように教育すると述べている。「かわいく」装っていれば王子様と結ばれることが可能で、それが幸せにつながる。このメッセージからは女兒本と通底するものを見出すことができるだろう。

『カンペキ おしゃれの絶対ルール 1001』(2013, 世界文化社)における主人公は、「かわいさ」を獲得した途端に、学校内で有名なイケメンにデートに誘われている。かわいくなることに関しては積極的であるのに対して、恋愛に関しては受け身であることが求められている。他の女兒本においても、少女が主体性をもって恋愛に参加することはバレンタインデーにのみ許された行為であり、その他の場面では声をかけられることを期待し続けている。

以上のように、第三章では女兒本が求めている少女像がプリンセスと類似した性質を持っているということを確認した。少女たちは自分の意志で異性愛への参加を誘導されるにもかかわらず、あくまで受け身であることを求められ続けるのである。

## おわりに

本研究では、「女兒本」を題材に、その定義を行ったうえで、現代の少女たちに対して女性からの規制が行われているということ論じた。

女兒本は、少女マンガ誌とファッション誌が共に女子小学生の消費文化に関心を持っていた時期に、それらが従来の男性から与えられる規範と融合する形で生まれたと考えられる。第一章では女兒本の分類を行ったうえで、この誕生の過程を確認した。その誕生は2009年であると考えられ、2024年現在までほぼ絶え間なく発行されており、その人気はこの15年間維持されている。また、近年では関心の幅が広がり、男性の目にも触れるようになった。

第二章では、女兒本の中で異性愛が常に規範として成立し続けていることを論じた。その内容として、異性愛がほぼ規範として成立していることは共通しており、性的マイノリティの存在が一般にも可視化されたはずの近年においても、同性愛を含むそのほとんどが認められることはない。しかし、それほどに異性愛が規範として成立している状況に身を置きながら、少女たちは性的な交渉の一切を禁じられる。知識は求められる一方でその実践が認められず、清純さの維持が求められるという構造は、明治時代の「少女」の誕生以降少女に求められてきたイメージの再生産として捉えることができるだろう。

第三章は、第二章で明らかにした少女像を実現するために少女たちが何を制限されるのかを論じた。そのための規範は、少女たちにとって異性愛に参加すること自体が彼女たちに利益をもたらすことであるという大人たちの考えに基づくものであるといえる。加えて、従来男性が中心的に担ってきたその規範の再生産が、女兒本においては女性によって行われていることもひとつの特徴であろう。この再生産の過程は、「女子力」という言葉に「女らしさ」が交換されたことと深い関係があると思われる。この再生産の結果として、若桑[2003]の論じるプリンセス的少女、つまりは美しく装った受け身の少女が現代でも生み出され続けている。

女兒本というメディアは、存在こそ新しいものであるが、これは近年の少女文化のなかで十分に重要な役目を果たすようになってきている。雑誌が担ってきたファッションやメイクなどの外見の修辞に関

する方法だけでなく、内面も磨く必要があるということを強く主張し、異性愛に順応するための方法を徹底的に教育する女児本が異性愛規範の再生産において果たす役割は決して無視できるものではないだろう。

本研究では、女児本を異性愛という観点から分析したが、これらの書籍の中で近年恋愛と同等かそれ以上の価値を持つものとして描写されているのが友人関係のことである。女性同士のコミュニティの形成に関する研究はさまざまな方面で行われている。少女文化においてもその重要度が近年は上がりつつあるのだろう。また、女児本が実際どのように受容されているのかという点も検討すべきであると思われる。本研究では需要のされ方に関する記述はほぼすべてが筆者の体感によるところとなった。一次資料の分析から明らかに述べることができるのは、大人がどのようなことを少女たちに求めているのかということにすぎない。これら二点を今後の課題として設定し、報告の締めくくりとした。

## 参考文献

- 今田絵里香 2007 『「少女」の社会史』 勁草書房
- オリコンニュース 2019 「増える児童向け”トリセツ本” 現代の女子小学生が抱える一番の悩みは「人間関係」 URL: <https://www.oricon.co.jp/special/53736/> (2024年12月23日参照)
- 纒坂英子 2013 「女性誌にみる伝統的性役割」 『駿河台大学論叢』 47巻 pp.229-240
- 菊地夏野 2019 『日本のポストフェミニズム; 「女子力」とネオリベラリズム』 大月書店
- 小山静子・赤枝香奈子・今田絵里香編 2014 『セクシュアリティの戦後史』 京都大学学術出版会
- 今田絵里香 「異性愛文化としての少女雑誌文化の誕生」 pp.57-77
- 桑原桃音 「1970~1990年代の『セブンティーン』にみる女子中高生の性愛表象の変容」 pp.245-265
- 杉本章吾 2015 「少女マンガ誌から少女向け総合誌への変容; 2000年代以降の『ちゃお』における少女マンガの位相」 『文藝言語研究』 68巻 pp.1-30
- 田代祐子 2024 「なぜ? 女兒向け本、社会人から大反響で10万部突破 編集者が明かす、意外なヒットの理由」 リアルサウンドブック URL: <https://realsound.jp/book/2024/05/post-1656224.html> (2024年12月13日参照)
- 中村桃子 2009 「なぜ少女は自分を「ぼく」と呼ぶのか」 『新編日本のフェミニズム7 表現とメディア』 岩波書店 pp.275-290
- 難波功士 2001 「「少女」という読者」 『マンガの社会学』 世界思想社 pp.188-220
- 根来菜月 2021 「小学生におけるジェンダーについて」 『立正社会福祉研究』 23巻 37号 pp.147-158
- 淵上愛子 2007 「小学生向けの学習雑誌にみる女の子と男の子」 『女性学評論』 21巻 pp.167-188
- 四方田犬彦 2006 『「かわいい」論』 筑摩書房
- 若桑みどり 2003 『お姫様とジェンダー』 筑摩書房

## 資料一覧

本研究で収集した一次資料としての女兒本を一覧に表示する。並び順は発行年によるものとしている。なお、書誌情報は、一律で国立国会図書館に記録されているものとしている。

発行年	著者・编者	タイトル	出版社
2010	ガールズ向上委員会	『ミラクルかわる! キレイ&おしゃれのヒミツ』	西東社
2011	マドモアゼル・ミータン 監修	『ミラクルかわる! 幸せをよぶ魔法の習慣』	西東社
2012	ピチレモンブックス編集部	『これでバッチリ!! キラキラガールレッスン』	学研パブリッシング
2013	キラ☆カワ girls 委員会	『カンペキおしゃれの絶対ルール 1001; キラ☆カワ Girl』	世界文化社
2015	ガールズ向上委員会	『ミラクルハッピーおしゃれガールレッスン DX』	西東社
2016	ハッピーおしゃ	『めっちゃかわ☆おしゃれレッスン; 本気で使えるテ	ナツメ社

	れ研究会	クがいっぱい』	
2016	キラキラリサーチ委員会	『女子力アップレッスン帳;おしゃれガールをめざせ!』	PHP 研究所
2017	辰巳渚 監修	『女子力アッププリンセスマナーレッスン;ステキガールをめざせ☆』	PHP 研究所
2018	朝日新聞出版	『365DAYS かわいさアップ&ハッピーイベントBOOK』	朝日新聞出版
2018	ミラクルガールズ委員会	『ミラクルガール相談室女の子のトリセツ』	西東社
2018	めっちゃカワ!!おしゃれガール委員会	『おしゃれ&キレイモデルみたいになれるBOOK;めっちゃカワMAX』	新星出版社
2019	ステキ女子研究会	『ミラクルガール相談室ヒミツ時のステキ女子☆レッスン』	西東社
2019	ミラクルガールズ委員会	『ミラクルガール相談室女の子のトリセツトキメキ days』	西東社
2019	はぴふるガール編集部	『かわいいのルール;自分をもっと好きになる』	池田書店
2020	佐藤夕	『12歳までに覚えないマナー&常識BOOK;小学生のステキルール;めっちゃかわMAX!!』	新星出版社
2020	(著者不明)	『めっちゃ盛りMAX スペシャルおしゃれBOOK;ファッションヘアアレンジメイク』	東京書店
2020	渋谷昌三 監修	『一生の心友をつくる!友だちと仲よくなるBOOK;小学生のステキルール;めっちゃカワMAX!!』	新星出版社
2021	上谷実礼 監修	『しあわせのレッスン;自分のことも、相手の心もよくわかる!;アドラー心理学で悩みを解決;今よりもっとステキ女子になる!』	KADOKAWA
2021	井垣利英, 宋美玄 監修	『No.1 きちんと日常のマナー&自分を守るルールまとめ note』	日本文芸社
2022	ミラクルデイズ研究会	『ミラクルデイズ♪おしゃれ&キレイバイブル366日』	西東社
2022	諏内えみ	『ミラクルガール相談室ステキ女子のふるまいルール』	西東社
2023	大野萌子 監修	『ミラクルハピネス魔法のことばレッスン』	西東社
2023	宋美玄 監修	『ミラクルハピネス素敵なからだレッスン』	西東社
2023	Kyoko 監修	『わたしに似合う最高にかわいくなる色のルール;Fashion Style BOOK パーソナルカラー診断;めっちゃカワMAX!!』	新星出版社
2023	ミラクルガール	『ミラクルガール相談室女の子のトリセツスマイ』	西東社

	ズ委員会	ル days』	
2024	めちゃカワ!!おし ゃれガール委員 会	『モデルみたいにかわいくなれる BOOK ; めちゃ カワ MAX!!』	新星出版社